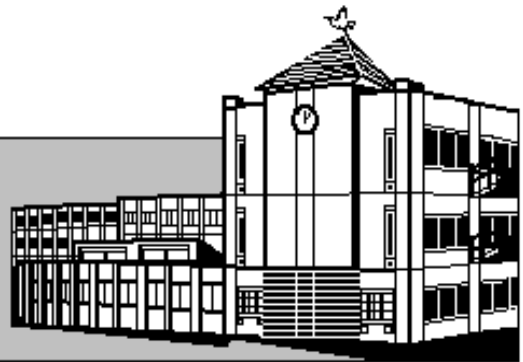


# 図書館だより



2003年度 第1号 (2003年7月)

編集・発行 敬和学園大学図書館

## 目次

怠惰な男の図書館利用法.....	国際文化学科	富川 尚 (1)
神経症について.....	英語英米文学科3年	斎藤 綾子 (3)
新着図書(国際関係) .....		(4)
事務室より.....	図書館長	柴沼 晶子 (4)

## 怠惰な男の図書館利用法 図書館と私

国際文化学科専任講師 富川 尚

自分が他の人にどの様に映っているかは分からないが、私は決して「ガリ勉」タイプの間人ではない。子供の頃から本を読むのがあまり好きでなかった私は、マンガばかり読むので親を困らせたことを覚えている。特に一人で家にいるとき活字の本は相当の努力を払わなければ読めなかった。そうなったのは基本的に性根がグータラ、つまり怠惰な人間であったからだと思っている。

しかし、そんな私でも図書館は子供の頃から好きな場所であったし、今思えば、大学生になってからは結構利用し尽くしてきたとも言える。大学にいる時間の多くは大学図書館で過ごしたし、研究者を目指すようになってからは国立国会図書館や他大学の図書館、公立図書館など様々な図書館を利用してきた。しかし残念ながら、成長とともに本が大好きになった訳ではない。私はあくまで図書館が好きだったのであり、そこが居心地がよかったり、作業がはかどるがために利用し続けたのである。そこで今回は本好きでもない人間がなぜ図書館の愛用者となったのかを書いてみたい。

話は変わるが、私は生まれも育ちも京都であり、

大学院までの青年期もそこで過ごした。その京都には春から秋にかけて多くのカップルが集う名所がある。それは三条から四条にかけての鴨川の西岸である。確かにそこは大き目の石が敷き詰められているので座りやすく、比較的速い川の流れが涼しい風を起こしてくれるので憩いの場所となっている。ただそこが特別に面白いのは、夕暮れになると何処からともなくカップルが集まってきて、きちんと等間隔で座っていくことだ。三条から四条まで二人だけの小さな世界が飛び石のように点々と連なり、カップルでない人間が居づらく感じるという非常に迷惑な、独特の空間が創り上げられるのである。(事実私はカップルでなかったためにその場からの退散を余儀なくされた屈辱の記憶が少なからずある。)

しかし、現地に一度行ってもらえれば、そこが決して風光明媚なところではないことがお分かりになると思う(行けない人はインターネットで「鴨川」「カップル」「等間隔」といった言葉で検索すればいくつかの写真を見ることができる)。見方によっては街中の変哲もない川辺の、カップルだけが異常に多い場所だとも言える。これは近くに人のもっと少ない静かな場所も、みんなで遊べるアミューズメ

ント施設もたくさんあるにもかかわらずそうなのである。しかしこうした現象はあまり驚くべきことではないらしい。私が学生時代に読んだある科学雑誌には、心理学的な視点から見て、鴨川は日本で最もデートに適した場所であるとすら指摘されていたのである。

その説の根拠は、少し不思議で複雑なカップルの心理に置かれていた。簡単に言うと、カップルの心理には、知り合いなどには見られたくないのあまり人には会いたくないという当然の欲求があるのと同時に、不特定の人に見られることで適度な刺激も受けたいという無意識の願望もあるということであった。だから人の目はあるが、自分たちが何物であるのか特定されることがないという匿名性が確保される状態が理想的で、その条件を満たす代表的な場所が鴨川だということであった。

確かに夕暮れ後の鴨川の川辺はカップルをロマンチックな気分させやすい。料理旅館の提灯や飲屋街のネオンさらには橋の灯籠などが出すやわらかな弱い光はお互いの顔をうっすらと映しはするが、他のカップルの存在は希薄にさせる。さらに川のせせらぎは二人の会話が他の人たちに聞かれるのを防ぐ。こうして二人にとって少し落ち着く小空間が出来上がるが、そこは部屋の中と違って二人の気持ちを決して弛緩させ過ぎることはしない。こうして矛盾する二つの願望が高度な形で両立されるのである。こうした心理を知ってか知らずか、カップル達は常に等間隔に並び続けるのである。

残念ながら私は鴨川をほとんど利用することができなかったが、図書館をよく利用することになったのには、それに近い心理的要因があると思っている。つまり集中して勉強するには、一人きりの環境が良いが、一人きりだと往々にして怠惰の虫が目をさますというジレンマを抱えているのである。私の場合、知り合いが傍にいと気になって集中できないくせに、一人になると睡眠やテレビといった誘惑に打ち勝つ確率はかなり低い。図書館はその矛盾を絶妙なバランスで解消してくれたのである。まず、余分な私語が禁じられるので、静かだし、知り合いがいても気に留める必要がなかった。一方寝転ぶこともテレビを見たりラジオを聞いたりすることもできないので、休息にしても最短時間に抑えることができたのである。

そこで具体的に私が図書館をどのように利用するようになったかを紹介したい。まず大学に入学して友人もまだいなかった頃、自分の居場所が見つからなかった私は図書館で授業の空き時間を過ごす習慣を身につけた。というのも大学の周りにはゲームセンターはおろか、レストランすらなかったので他にいくところがなかったのである。だから最初は、新聞を読んだり、面白そうな本を探してみたり、ビデオを見たりといった「時間つぶし」が主な利用目的であった。そうした消極的な利用方法に変化が起きるのは、一年生の前期末に締め切りの迫ったレポートを作成したことによる。提出を諦めようかと思っ

ていた締め切り当日、図書館にこもったところ、意外にもすんなりとレポートが完成したのである。私の学生時代は、レポートや答案の書き方を教えてくれる人もいなかったの、初めて書くレポートの負担はかなり重たかった。だから完成した時の喜びは大きかったのである。この成功に味をしめた私はほとんどのレポート作成や発表の準備、試験勉強を意図的に図書館でやるようになった。

そこではっきりしたのは、この効用は特にやる気が出なかったり、作業に苦痛を伴うような課題に取り組む場合に表れたということである。こうした課題は到底家でははかどらず、大学を無事卒業できたのも図書館の効用によるところが大きいのと思っているほどだ。



そして大学院に入るとその効果はより鮮明になった。私が入学した頃の同志社の大学院生は恵まれており、五、六人で使う研究室が人数分確保され、そこには各自の机や本棚やロッカーがあてがわれていた。しかし、私はその研究室で勉強した記憶がほとんどない。私にとって研究室は仲間と話をする場であつたり、荷物を置いたりする場であつたに過ぎない。相変わらず勉強するときは大学院図書室を利用し続けた。むしろ、授業が登録者二、三人程度のものばかりで、毎週原書を読んだの発表が続くという過酷な生活になったので、朝から晩まで図書館に入り浸るようになったと表現したほうが良い。その結果、請われて、そこでアルバイトまですることになってしまったほどである。

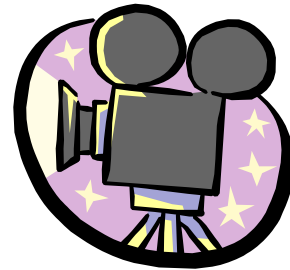
ただ、そのときの生活は苦しいことばかりではなかった。苦しかったからこそ仲間達と深く付き合い、そこからいろいろなことを学ぶことができた。今思えば、そういった人間関係を培ってくれたのも図書館だと感謝している。午後九時頃になると図書館で勉強をする仲間がフラフラになりながらも課題を一段落させるようになるが、そうした時間になると暇ができた人間が休憩場所に集まりだし、何処に飲みに行くかの相談が始まるのが常であった。私はこうした図書館が生み出すメリハリの利いた人間関係が好きであった。

こんな私だから、大学の中心は図書館であると信じているし、多くの学生に図書館を有効利用してほしいと心から願っている。また、私が持っているような怠惰な人間のジレンマに苦しんでいる人も少な

からずいると思う。そうした人に、ジレンマをうまく克服する各人それぞれの術をできるだけ早く身につけてもらいたいというメッセージが届けば誠に幸いである。

ただし最後に少し言い訳をしなければならない。実は私は最近大学図書館をあまり使っていない。これは教員になった私には学生・院生時代にはあった匿名性が確保できなくなったからである。だから今の私の作業場はもっぱら喫茶店になってしまった。確かに、お金がかかる上に、長時間居座る客に対する店員の冷やかな視線や仕打ちに耐えなければならなかったりと、嫌な思いをすることはある。しかし、怠惰な自分が抱えるジレンマを超越することができる最後の砦を失うことは私には到底できない。だからそういう時は「集中して作業ができる時間は何より貴重だ」とイラツク心に言い聞かせて、悪意を示す失格店員ならびに店長(あくまでも個人的な判断による)の仕打ちに対しても満面の笑みでもっ

て受け流すようにしている。しかしその無理が心に新たなジレンマを生み出していることに気づかないようにする方法はまだ模索中である。



## 神経症について

英語英米文学科 3年 齋藤 綾子

三年生の佐藤先生のゼミは、自分たちで意見を出し合って、何をするのか決めるところから始まりました。ゼミの本題である無意識への理解を深めることが目標でした。

最初に取り上げたのは「恐怖症」です。恐怖症の定義とは「抑圧によって、病因となる素材から分離されたリビドーが、ヒステリーのように体へと転換されず、不安(歪曲=転置)となってあられた症状」のことをいいます。言葉の説明だけでは不十分なので、ゼミでは映画を使用しました。アルフレッド・ヒッチコックの『めまい』(高所恐怖症)と『マーニー』(赤色恐怖症、稲妻恐怖症、男性恐怖症)を観ました。この二つの映画の中では、主人公は身近で人の死を体験した直後に恐怖症になっています。そして最後のシークエンスで病因の真相が解明すると、恐怖症は消滅します。主人公に共通しているのは、本人がなぜ恐怖症なのかわかっていないことと、解読できた時点で恐怖症が消滅する点です。しかし、本人自身が恐怖症の原因をわかっていない(無意識に入り込んでいる)ため、それを解読し、理解することは簡単なことではないと思いました。

「恐怖症」の後には「身近な人間の弔い」を勉強しました。身近な人間がなくなってしまうと、人は「悲哀」か「メランコリー」に襲われます。身近な人間の死で低下した精神状態から抜け出せるものが悲哀で、抜け出せないものがメランコリーです。何

が失われたのかはっきりわからない、その人自身も何を失ったのか意識的にはっきりつかないというのがメランコリーの精神状態です。失われたものをよく理解している悲哀とは、この点で区別されます。

この「身近な人間の弔い」に関連して、ゼミでは映画『ミシェル』を観ました。『ミシェル』の中で主人公ミシェルは、恋愛や宗教を通じて自分のあるべき姿や心の拠り所を探していました。自分のやるべきことがわからずに、例えば宗教を変えることで寂しさを紛らわせたり、あるいは強迫行為(禁止と儀式)を繰り返していました。その背景には本当の父親の死が関係していると思います。「本当の」とつけたのには理由があり、実家には母親の再婚相手がいるからです。新しい父親との関係は良いとはとても言えず、ここにも本当の父親の死が関係していると思います。ミシェルは本当の父親の死を受け入れられていないので、新しい父親も受け入れられないのではないかと考えました。

一本の映画でも、様々な角度から分析することによって、たくさんの事柄が見えてきます。人間の行動には実はちゃんとした意味があり、それをコントロールしているのが普段まったく気にしない無意識だというのは、今まで勉強したことがなかったことなので、新鮮で、これからもっと深く理解していきたいと思います。

## 新着図書

今回は、国際関係の図書を集めてみました。

ジョセフ・ロスチャイルド『現代東欧史』  
ジェロルダ・シェクター『フルシチョフ』  
中西寛『国際政治とは何か』  
白井実稲子編『ヨーロッパ国際体系の史的展開』  
アルフレート・グロセル『欧米同盟の歴史』  
羽場久子『拡大するヨーロッパ』  
ヴォイチェフ・マストニー  
『冷戦とは何だったのか』  
加藤俊作『国際連合成立史』  
植田隆子『地域的安全保障の歴史的研究』  
『現代ヨーロッパ国際政治』  
チャールズ・グラント『EUを創った男』  
シャルル・ド・ゴール『ド・ゴール大戦回顧録』  
アンソニー・イーデン『イーデン回顧録』  
イアン・クラーク他編『国際関係思想史』  
納家政嗣『国際紛争と予防外交』  
姜尚中『日朝関係思想史』  
石井修他編『現代アメリカ外交キーワード』  
田中明彦監修『新しい戦争時代の安全保障』  
デレック・ヒーター『統一ヨーロッパへの道』  
鈴木健人『封じ込め構想と米国世界戦略』  
水島朝輔『世界の有事法制を診る』  
山手治之他編『国際社会の法構造』  
篠原初枝『戦争の法から平和の法へ』  
小学館編『国連憲章』  
中川淳司『国際経済法』  
滝川敏明『日米EUの独禁法と競争政策』  
川俣侃他編『国際政治経済辞典』  
山手治之他『ベーシック条約集』  
カ久昌幸『ユーロとイギリス』  
『イギリスの選択』  
ピーター・スタイン『ローマ法とヨーロッパ』  
アンリ・ピレンヌ『ヨーロッパの歴史』  
C. ドーソン『ヨーロッパの形成』  
森田安一『物語スイスの歴史』  
清水芳見『イスラームを知ろう』  
美根慶樹『スイス歴史が生んだ異色の憲法』  
木村俊道『顧問官の政治学』  
酒井啓子『イラクとアメリカ』  
『フセイン・イラク政権の支配構造』  
熊谷直『民族紛争を読み解く』  
百瀬宏『国際関係学原論』  
浦野起央『人間的国際社会論』  
木畑洋一『帝国のたそがれ』  
中村睦男他編『欧州統合とフランス憲法の変容』  
坂井一成編『ヨーロッパ統合の国際関係論』  
久保広正『欧州統合論』  
イクバール・アフマド『帝国との対決』

森岡健次他編著『イギリス近代史』  
森建資『イギリス農業政策史』  
ノーム・チョムスキー『テロの帝国アメリカ』  
『グローバリズムは世界を破壊する』  
ケーン・ブース他編『衝突をこえて』  
松井和久他編著『アジアが見たイラク戦争』  
ジョン・フリードマン『市民・政府・NGO』

## 事務室から

図書館長 柴沼 晶子

いつの頃からか「～を読む」という書名が多くなっています。最近の新着図書案内にも『いま、教育基本法を読む』（堀尾輝久著、岩波書店）『子ども論を読む』（小谷敏編、世界思想社）『ジェンダーから世界を読む』（関啓子他編、明石書店）『多文化主義で読む英米文学』（木下宅他編、ミネルヴァ書房）などが目につきます。「～を読む」とは「論ずる」という包括的な論旨の展開よりも、主観的な見方、あるいはある観点からひとつのことがらを解釈し直すということでしょうか。これらは著者の立場や論点が明確で、刺激的であり、新しく目を開かれることや場合によってはそこにとりあげられたテーマの一般的な解釈を知ることができます。しかし「～を読む」という著書は読み手の側にそこに取り上げられたテーマの基本的な知識があつてこそ、「あたらしい読み」や「ある観点からの読み」がより一層魅力的になるのかも知れません。

巻頭エッセイを執筆していただいた富川講師は、国際関係がご専門で、先月(6月)共著で『国際組織と国際関係 地球・地域・ひと』を出版されました。Keiwa Authors' Corner に展示しております。学生にとっては教員が同じ場所で書を紐解いておられる姿に接することは、教壇からの呼びかけとは違った無言の教えを得る機会となることでしょうか。富川先生に限らず、先生方には図書館をフルにご利用いただきたいというのが館員一同のねがいです。

ゼミがそろそろ軌道に乗り始めたようです。今回は3年生の斎藤さんに「ゼミことはじめ - テーマ探し」について紹介していただきました。セメスタ - 制ではありますが、1年間どのようにテーマが展開され、纏められていくのでしょうか。図書館ではシラバスに挙げられている各ゼミの参考文献は揃えております。研究の過程で必要になったものもできるだけ用意したいと考えています。